

英 語 科

武 田 美 奈
鈴 木 孝 司
水 田 怜 樹
今 野 怜

I 研究主題と英語

1. 研究主題のとらえ方—教科の「目指す生徒像」

英語科では、研究主題を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、3年次の実践に取り組んできた。

【英語科の目指す生徒像】

外国語を通じて、主体的に人や社会と関わりをもち、
場面や目的、相手に応じてより適切に伝え合う生徒

英語科は、外国語を通じて、コミュニケーション能力の基礎を養うことを目標とした教科である。その具現化のために、積極的に相手とコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と、「聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと」などの言語運用能力の育成は不可欠である。このことを踏まえ、本校では、外国語を通じて、相手に自分の考えを伝えたり、相手の考えを理解したりしながら、自ら挑戦したくなるような課題づくりを目指してきた。その過程で、運用できる言語能力に気付き、より適切に使いたいという態度が育まれ、繰り返し課題解決に挑んだりしながら、より適切に伝え合うための能力を相互作用的に育むことができると考える。「主体的に」とは、話し手と聞き手が互いをより深く知ろうとしたり、自他国の特色に関心を持ったり社会の諸問題に国際的な視点で関わろうとしたりすることである。「より適切に伝え合う」とは、例えば、相手に応じてより伝わりやすい語句を選択したり、状況に応じて使用すべき表現を選択したりすることや、相手の意向を十分に理解できるまで聞いたり、相手の考えを尊重した上で応答したりすることである。

【3年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視して育てる 資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・考えを深めたりより豊かに伝え合ったりするために、主体的に題材や他者と関わったりそれを基に表現したりしようとする力	・考えや思いを伝え合いたくなるような題材や活動の設定。 ・内容について自ら output 活動したくなるような input 活動の設定。
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・既習事項を生活体験や自分の考えと結び付けて、相手の意向を理解したり、自分の伝えたいことを表現したりする力	・既習事項を関連付けた新出事項や題材の導入の工夫。 ・既習の語句や表現を選択する必要がある言語活動の中で、繰り返し挑戦させる場の設定。 ・相手の意向を正しく理解しているかを確認させる場の設定。
場に応じて判断基準をつくる力	・場面や相手に適する内容やその場に応じた表現方法としてよりふさわしいものを判断しながら言語運用する力	・相手や目的を意識しながら、英文や伝え方を選択させるような言語活動の設定。 ・選んだ表現や語句が、場面や相手にふさわしいものであるかを活動後に自分で振り返ったり、話し手が選択した表現の意図を確認させたりするような振り返り用紙の活用。
学びを評価し、課題を見付ける力	・より質の高いコミュニケーションに向けて、これまでの言語使用場面や学習から、より適切な内容や表現方法を追究する力	・CAN-DO形式での評価。 ・英語による表現の質の高まりや表現者の意向を理解していることを実感させたり、より適切な表現を模索させたりするための振り返り。

2. 研究のあゆみ

英語科では、前研究において、相手の理解度を確認しながらやりとりをすることと、生徒自身が表現の手助けとして立ち返られるような振り返りの工夫をすることが、課題として挙げられた。そこで本研究では、「考えを深めたり、より豊かに伝え合ったりするために、主体的に題材や他者と関わること」「学びを振り返り、それを活用できる場を判断して表現すること」を重視して取り組んできた。

1年次は、英語で深く思考し、伝え合いたくなるような題材や学習活動の設定に重点を置いた。ALTの要望に応えたり、自分の学校生活に直接関わるような課題を設定したりすることで、仲間と英語で情報交換しようとしたり、グループやペアで協同的に学ぼうとしたりするなど、主体的に課題解決に向かおうとする姿が見られた。一方で、社会的な話題や、自分の生活体験から距離があったりする話題に対して、英語で思考・やりとりをすることが難しくなることがあった。さらに、相手の言ったことに対して反応できず、あいまいな理解のままやりとりを進める場面が見られた。そこで2年次は、学習課題や教科書の話題、特に社会的な話題を、生徒がより主体的に学ぶことができるような課題提示と、聞く力・読む力を付けるための手立ての工夫に重点を置いて研究を進めてきた。その際に、生徒が自身の学びを自覚したり変容を実感したりすることができるような振り返りや相互評価のさせ方を工夫しながら実践してきた。

3. 教科としての振り返り

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 社会的な話題を扱った題材、例えば、発展途上国の子どもたちの現状やエネルギー資源の題材において、生徒が英語を通してより主体的に学ぶことができるように、社会科で学習した既習の知識を引き出したり、単元を貫いた問いの設定を工夫したりした。さらに、学習活動において英語で題材の内容や自分の考えを伝え合う活動を設定した。その結果、生徒はその単元を終えた後も、その題材についてもっと深く知りたいという探究心が芽生えた。
- ▲話す活動において、生徒が場面や目的に応じたより適切な表現を自覚することができるように、毎時間ある話題について意見を伝え合う活動を設けた。異なる相手と数回、意見を伝え合う過程で、使用した表現や言えなかった表現を全体で共有し、ペアで相手の言ったことを正確に受信したか確認させたり、言いたかったことを聞き合ったりさせた。生徒がペアや全体で自分が用いた表現を振り返り再思考することで、より質の高いコミュニケーションを目指して言語運用しようとする生徒が増えた。一方で、生徒がより適切な表現の判断基準を明確にできるまでには至らなかったため、共有のさせ方と教員の見取りにおいて、より適切な手立てを講じる必要がある。
- 生徒を対象に行った授業アンケートより、既習事項がそれ以降の単元で生かすことができている生徒が多いことがわかった。また、授業外で英語の映画や広告を自発的に見たり読んだりするなど、学んだことを実生活でさらに探究しようとする生徒もいた。これは、単元の導入の仕方やゴール設定、また、単元をまたいで既習の言語材料を繰り返し聞かせたり使用させたりしたことが効果的だったのではないかと考える。
- ▲場面や目的に応じてより適切な表現を追究する力を付けさせるために、各学年、話す活動や書く活動において生徒同士で相互評価させる場面を設けた。評価カードや振り返りシートの記入状況から、生徒が感じている評価基準と教員が狙っている評価基準にずれが生じていることがあった。このことから、生徒と教員が評価基準を共通理解するための手立てと、課題やモデルの提示方法を工夫する必要があると感じた。